

## 序

『政治学研究』第62号を皆様にお届けできることを、嬉しく思います。

近年の政治学科では、私たち教員が自明視してきた「論文を書く」という行為の意義を学生と共有しにくくなっていると感じます。論文を書くことに魅力を感じない学生が、すべて怠惰な学生というわけではないでしょう。問題意識が明確で行動的な学生のあいだで、論文を書くことより優先すべき何かを確信し、選択する人が増えているようです。それはそれで喜ばしいことで、再考すべきは「論文を書く」という行為の教育的効果をいまだ特別視してしまう、私を含めた教員の固定観念なのかもしれません。

ただし、大学教育において、論文を書くという行為の意義が薄れたとは思いません。必要なのは「研究会」という授業科目を、この学科が学生に提供すべき多様な教育機会のなかに適切に位置づけしなすことです。アカデミックな訓練に貴重な時間を費やす覚悟を決めた学生に、より質の高い論文指導を提供する場として研究会を再構成していく努力が、私たち教員個人にも、組織としての政治学科にも求められていると考えています。

そのような状況において、この『政治学研究』の果たす役割はますます大きくなっています。『政治学研究』は、主に慶應義塾大学法学部政治学科の研究会に所属する学部学生が寄稿する研究論文集です。投稿論文は学生組織である政治学科ゼミナール委員会を通じて募集されますが、法学部の教員が組織する法学研究編集委員会、および私たち政治学科学習指導によって監修されます。編集は、慶應義塾大学出版会が行ないます。本誌に投稿しようとする学生は、事前に法学部教員の指導と推薦を受けなければなりません。つまり『政治学研究』は事実上、大学組織が刊行する「紀要」と呼ばれる学術雑誌のひとつです。大学図書館でも、大学院生や大学教員などの研究者が寄稿する他の紀要と同じように扱われ、所蔵されます。

このように『政治学研究』は、研究者や専門職を志す政治学科の学生が自らの研究の成果を世に問う最初のステップとしての役割を果たしています。実際、本誌に論文を投稿した後、大学院に進学し、研究者や専門家になった人もたくさんおります。今号に寄稿された皆様もまた、私たちの社会の知の系譜を受け継ぐ、優れた人材として飛躍することを願っております。

最後になりましたが、政治学科ゼミナール委員会、法学研究編集委員会、慶應義塾大学出版会を始め、本号の刊行にご尽力された方々に、厚く御礼を申し上げます。

2019年11月19日

法学部教授・政治学科学習指導

塩原 良和